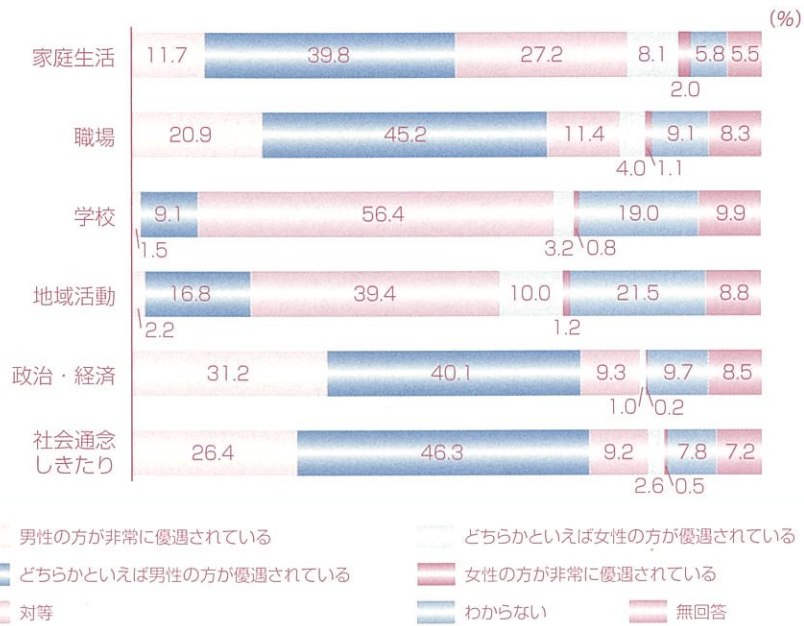


男女の地位は対等になっていると思いますか？

(2004年実施「西宮市市民意識調査」より)



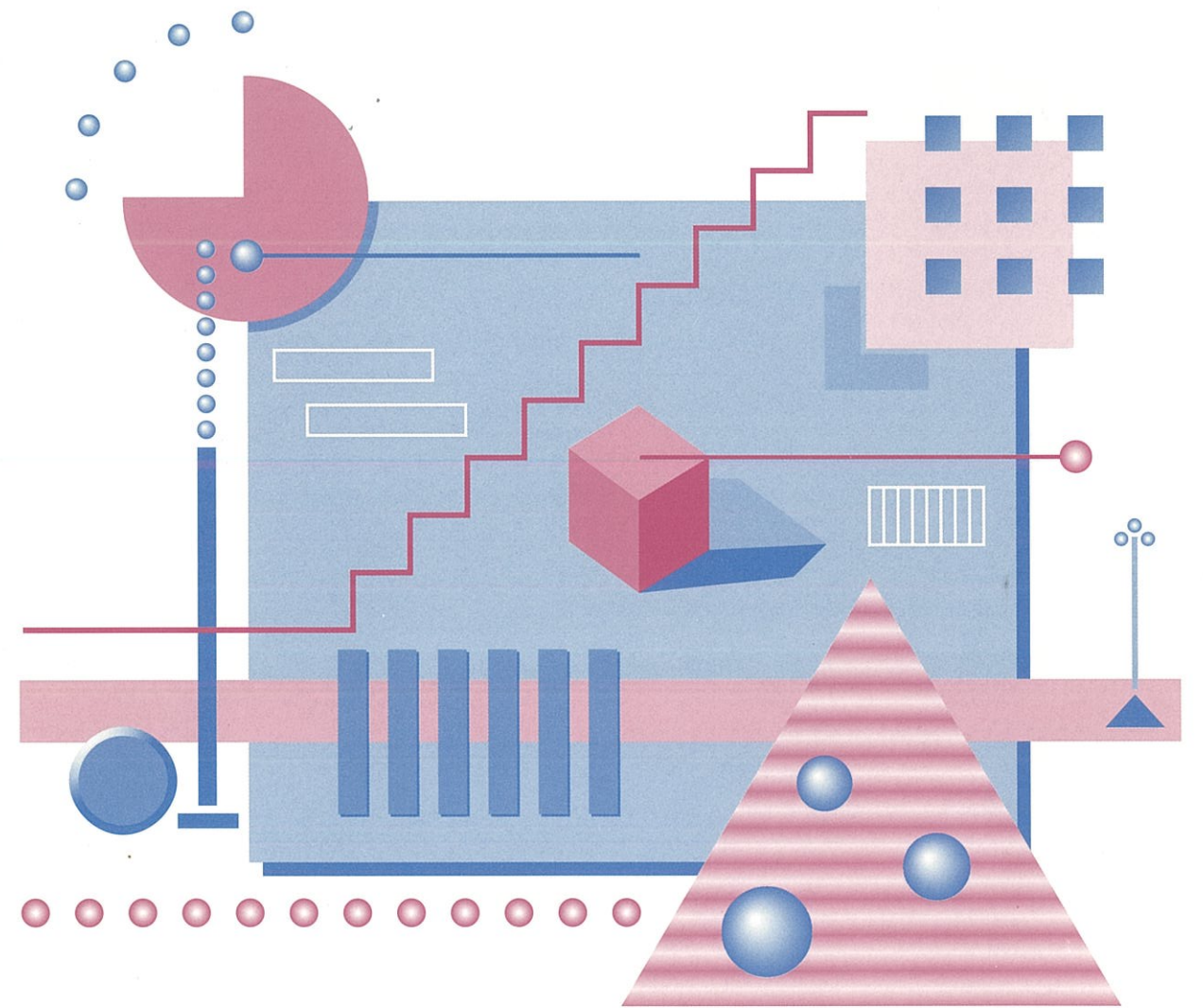
男女の地位について「対等」と答えた人が多かった分野は、「学校」56.4%、次が「地域活動」39.4%でした。しかし、このふたつの分野で、「無回答」「わからない」と答えた人は他の分野に比べて多く、約3割にもものぼっています。

男性が「非常に優遇されている」「どちらかといえば優遇されている」を合わせた答えで一番多かったのは「社会通念・しきたり」72.7%、この分野で「対等」と答えた人は9.2%。また、「家庭生活」で男性が「非常に優遇されている」「どちらかといえば優遇されている」と答えた人は51.5%、「対等」と答えた人は27.2%。日常生活の中で男女が対等という実感をもっている人が少ない状況がわかります。

自分らしく生きる

- 発行 西宮市男女共同参画センター ウェーブ
〒663-8204
西宮市高松町4-8 プレラにしのみや4F
TEL.0798-64-9495 FAX.0798-64-9496
- 発行日 平成17(2005)年3月
- 制作 (株)オフィス・オルタナティブ
- 編集協力 河村 潤子

自分らしく生きる



西宮市

選ばれる人生よりも 自ら選ぶ人生を

毎週1~2回の芦屋川辺りのジョギングを欠かさず、東京六大学対抗野球のOB会の試合には今も「東大チーム」現役出場の海老坂さん。

男性の生き方の中にも、主体的にシングルを選択する生き方があることを著書「シングルライフ／女と男の解放学」で“宣言”したのは1986年。この年は、男女雇用機会均等法が施行され、男女平等に向けて国の具体的な施策が滑り出した年でもある。

当時50代前半だった海老坂さんのシングル宣言が社会に与えたインパクトは大きく、男性シングルの是非論に発展し、やがてシングルという言葉は従来の「独身者」という意味とは異なった、新しい生き方のスタイルとして広がっていった。

その後、言葉が定着したほどに男性は生き方を選ぶ時代になったのだろうか。

“男の生き方”という選択肢がなかった

「なぜ結婚しないの？」という質問は、
現在ではセクシュアルハラスメントになりますが、
18年前はこの不躰な質問の砲火にあわられて、
かなり閉口されている様子が「シングルライフ」に
描かれています。

当時、独身という言葉をあえてつかわず、シングルとしたのはそれまでの男の独身者のイメージが悲惨だったということもあります。身だしなみを構わない、男やもめ、とネガティブなものが多かったですね。また、シングルの意味として自覚的に自立したライフスタイルを選ぶというイメージはあくまでも女性に対してであって、男性にはありえなかった。今とちがって、男性に生き方が選択できるほど多様な個人のあり方が許される社会ではなかったですから。僕自身はじめからシングルライフを確固たる主義主張としていたわけではありませんし。僕がシングルで生きてきたのは自分の中に「男の生き方」という発想がなかったからでしょう。

当時とても不思議だったのは、僕が結婚しないことに対して周りが口を揃えて「不自由だろう」と言うことでした。僕にとって自分のことは自分ですというだけで、男だから、台所に入るのはおかしい、洗濯することが変という意識はなかった。あの本で言いたかったのは「生活の自主管理」でした。

現在は、どのようなライフスタイルを
送っていらっしゃるのですか。

大学を定年で辞めてからは沖縄に家を借り毎月10日間

ほど行って、好きな海で泳いだり、自適の暮らしです。教師勤めは、時間的に生活を楽しむ余裕があったので基本的に生活スタイルは変わっていません。朝と昼は、珈琲の美味しい店へ行き、珈琲を楽しんで原稿を書きます。夕食は自炊、料理は日常の楽しみのひとつです。とくにパートナーが遊びに来るときや、友人を招いたときはフランス滞在中に覚えたプロバンス料理を作ります。人をもてなし、食卓をともに囲む、人との絆を深める大切な時間です。

シングルライフが自主管理というベースによって成り立つとすると、これから年齢的な意味でどこまで、どう自分で管理していけるかが大きな課題です。本、家、カードなどの持ち物を含めて、どんどん生活を簡素化していかなくちゃいけないでしょうね。妻役割の女性がいるわけではないので頼ることはできない。しかし、妻に先立たれ何もできない夫、という状況にもならない。老いによる生活の変化にどう対応していくか、シングルだからこそ、ずっと考えてきて、そして新たに向き合っていく問題です。

人生を役割で縛りたくない

どのような生き方ができるかということは、
職業と関わってくると思いますが。

シングルライフに繋がったのは、20代でフランス政府留学生として渡仏した体験だと思います。当時日本では東大大学院生であることは「肩書き」でしたが、フランスでは何の意味もなかった。フランス人にとって僕は目の前にいるただひとりの人間であって、どのような話し方をし、どのような体型でありということだけで判断される。「個人」であることの意味を学びました。

たしかに、会社勤めは教師より制約が多いという点で、

シングルライフを生きるのはかなり困難だと思います。逆に、だからこそ僕は教師を選んだとも言えます。教師は、シングルでいることが社会的ステータスに影響を与えない職業といえるかもしれません。一橋大学での教職時代は名刺をもったことも作ろうと思ったこともなかった。そんなことができる職種はおそらく限られているでしょう。傲慢だと非難されたこともありましたが。

人は社会や家庭の中でいろいろな役割を担って生きています。個人として生きるためには、「役割」としての生き方はできるだけ少なくしたい。僕にとって教師は大学での役割であって、海で泳ぐときに教師として泳いでいるわけではないのです。同じように男としてご飯を食べているわけでもない。家族をもてば夫や父役割を求められる。ひとつやふたつの役割に自分の生き方を限定して、それに縛られて全人生を生きていきたくない。男だからこうしなくちゃいけない、という考えに僕はついていきません。

自分の内にある言葉を聴く

現代は「多様化の時代」と言われますが、
男性の生き方の選択肢は広がったのでしょうか。

個人のレベルでは、確かに何をしてもある程度食べていけるし、絶対就職しなくてはという感覚が薄れたということでは選択肢は広がってきていると思います。でも、個人としての意識的な生き方は選んでいない。何をしあって大したことはないという感覚が広がっていることが現代の問題でしょう。教職時代、学生に、卒業するまでに自分の人生、何をしたいかを見つけれと言っていました。何でも選べるにも関わらず、結局何をしたいのかみつけれない学生が多かった。個人として生きるという意味ではとても希薄



海老坂 武さん

1934年東京生まれ。東京大学仏文科学。同大学院修了後フランス留学を経て一橋大学勤務。1996年関西学院大学教授。
おもな著書「戦後思想の模索」みすず書房、「シングルライフ」中央公論社、「新シングルライフ」集英社新書ほか。
サルトル、ボーヴォワール、ニザンなどの翻訳家。現在は「戦後が若かった頃」「かくも激しき希望の歳月」(岩波書店)に続く自伝の第2巻を執筆中。

な意志しかもせず、それでも何とかやっているというのが今の多様化の実態ではないでしょうか。選択の幅が狭い時代は人とちがう生き方を選ぶには、はっきりとした意志と覚悟が要りました。今は幅が広がっているだけに、選択するにも強い意志や少数であることの覚悟は必要ないのでしょうか。

言葉に対する感覚が散漫になって研ぎ澄ませることができないことも今の多様化の実態を作っています。自分の内にある声、言葉に耳を傾けないと、自分がどんな生き方を望んでいるのかはわかりません。

人は倫理ではなく、「美」でしか動かない。美しくないことはしない。シングルがカッコイイと思われていないから、積極的に選択している人が少ないのかもしれないです。

また、組織や集団の中心軸はまだまだ「男らしい価値観や仕組みを揺るがしてはならない」という価値観で動いています。しかし、自分たち多数派とはちがう生き方をする人を妨げるのは、人間として美しくない。「男は外、女は内」という問いの立て方自体がすでに実態とかけ離れているのですから。

選ぶということはとても難しい。しかし、どのような選択であっても自分の人生は自分で選ぶ意志がないと、選ばれてしまう人生になってしまうでしょう。

男でも〇〇できる。男しか〇〇できない

社会のあり方は、私たち一人ひとりの意識を反映したものである。1999年に男女共同参画基本法が施行されて約6年がたち、それまでの女性政策は、男女共同参画政策に移行しつつある。男女共同参画という時代の中で、男性は「男らしさ」をどのように感じているのだろうか。

男でも〇〇できる

- 家事…23人
- 料理…15人
- 育児・子育て…9人
- 家事や育児…7人
- 妊娠…4人
- 妊娠・出産以外はたいしたこと…3人

その他

主夫／育児休暇をとること／赤ちゃん連れでお出かけ／おしゃれやインテリアにこだわる／感性豊かな仕事／正社員勤めといった世間体にとらわれず、自由な意思で自分の生き方を選択／既成概念に縛られない生き方／夢のために現実を捨てる

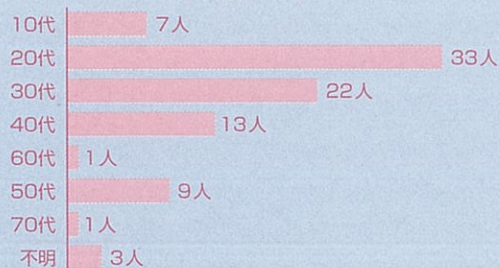
男しか〇〇できない

- 力仕事…10人
- 相撲の土俵にあがる…8人
- 男にしかできないことを思い浮かべることができない…8人
- 女を守る…4人
- ひげを生やす…2人
- バカなこと…2人

その他

高校野球の公式戦に出る／命がけの冒険／危険な仕事／年中無休で働く／若いころから少々危険や長い拘束時間など、ハードな仕事を任せる／家族を守る／男の気持ちを理解する／つまらないことに努力する／ロマンを求めて生きる／男らしいといわれる行動

回答者の年代



●ジェンダーの問題に関心のある男性89人に答えていただきました。

女にもてる男は〇〇である

- やさしい…10人
- マメ…6人
- 金持ち…4人
- 男にもてる…4人
- ヨン様…2人
- おもしろい…2人
- 頼りがいがある…2人
- うらやましい限り…2人
- 夢・ロマンをもっている…2人
- ルックスやスタイルがいい…2人

その他

空のように高く、海のように広い心の持ち主／少年のような心／自分を貫く哲学、深い愛がある／自信をもっている／自分勝手だけど少し弱さがある／イヤミがなく個性的／スマイルそして決めるときは決める／清潔にしている／活きが良く魅力的／落ち着きが必要／男からみて好ましいとは限らないから不思議／相手を一人の人間として尊重できる人／男にはあまり好かれない／実は女が嫌い

男は〇〇だから好きだ

- 単純…10人
- 自由…7人
- 夢・ロマンをもっている…7人
- あっさりしている…6人
- 子どもの心をもっている…4人
- ムチャなことができる…4人
- 男…2人
- 自分勝手…2人
- 嫌いな男とは付き合わない…2人
- 力がある…2人
- 女が好きになれるから…2人
- 生理がない…2人

その他

好奇心旺盛／何もたずねに旅に出られる／化粧や着飾ることもせず気楽／服装にお金を必要としない／足りないところは女性に補ってもらえばいい／荒々しい気性も男らしさとして認識される／友だち関係が楽／愚痴を言わない／カッコイイことがさまになる／何事も気合で乗りきっていく／義理人情を大切に

自由に生きるって難しい、でも楽しいはず

細見 三英子さん(ジャーナリスト)

「男でも『家事が』できる」がダントツ

直球あり、思いっきりの変化球あり、はたまた魔球あり。男性の本音がわかって楽しいアンケート結果。答えをみていきましょう。

*「男でも〇〇できる」

約3分の2の男性が「家事・育児」に関することを「できる」と答えています。「男でもできる」とわざわざ答えたのは、家事・育児の大切さが認識されているのと同時に、多分に自分の生活の中にもまるで空気のように位置付けられていないからかも。

家事・育児は、生きていくのに欠かせない呼吸みたいなもの。ここはひとつ、義務としてはもちろん、権利と感じてほしいなあ。

*「男しか〇〇できない」

「相撲の土俵にあがること」「高校野球の公式戦に出ること」は男性にしかできない。これは制度としてはそうです。さらに進んで、そんな制度に問題ありとみるか、制度を現認して良しとしているのか、どう評価しましょうか。

それ以外の「男にしかできない」という答えは、ほとんど女性にもできること。男性にしかできないというのは思い込みでしょうね。「男にしかできないことを思い浮かべることができない」、この答えに金メダル！

*「女にもてる男は〇〇である」

「やさしい人」が多いのは、女性に同じ質問をしても同じだと思います。「ヨン様」ブームもやさしいからでしょう。いわゆる「男らしい男」が女性にもてるわけではないのです。でも「男らしい男がもてる」と勘違いしている人も多い。女性にもてる男性が「男からみて好ましいとは限らないから不思議」という答えに金メダルをあげたい。「こんな男がどうして？」とばかりに、予想をことごとく外して振舞う女性たちを、驚き嘆きながらみている感受性もいいですね。

女にもてる男は「実は女が嫌い」という答えもニクイ。表面的なことに惑わされず、しっかり男をみなさい、というアドバイスと受け止めておきましょう。

*「男は〇〇だから好きだ」

「男は単純だから好き」「自由だから」「生理がないから」など、本音のオンパレードがおもしろい。男は「自由だから好き」という答えが多いですが、どう自由なのか、自由の中味を聞いてみたい。本来「自由」というのは、物理的には多少貧しくても、時空を超えて、何にも縛られず、充実して生きること。ところが「答」の自由は、24時間の枠内の「行動の自由」「無茶のできる自由」を指している例が多い。むしろ、女性のほうがバラエティに富んだ自由な生き方をしているのではないのでしょうか。

癒しの対象として共有されるヨン様

アンケートの答えにもあった「ヨン様」。私も彼にひかれています。夫は「あんなヤツ、どこがええねん」とあきれています。ヨン様ブームは、男性が考える「女性にもてる男性像」と女性にとって「好ましい男性像」のギャップを明らかにしてくれました。ヨン様は、日々の暮らしから解放してくれる「家族」として女性たちに共有されています。

先にみた「女にもてる男は「男からみて好ましいとは限らないから不思議」である」と答えた男性は、多分、だから「女はわからん」とクールでありながら、それでいて異なる性に対する好奇心いっぱい感受性でブームをみているのではないのでしょうか。

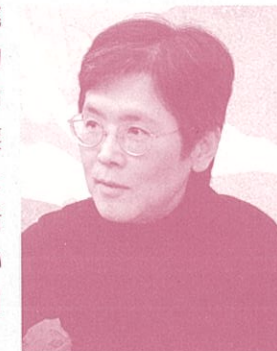
従来の価値観は通じない

今でも、たくさん稼いで妻子を養うのが男だと思っている人は多いし、いい学校を出て大会社に入ることを良しとする価値観も根強い。でも、数字で表れる成果を唯一の物差しとする価値観は、これからの社会では通用しないでしょう。そして、その成果主義に基づく男性のあり方も変わらざるを得ない。勝ち組と負け組にどんどん大別されるのを放置するのではなく、多くの人で分けあい、助け合っていくことを考える必要があります。

考え悩むことから始まる自立

アンケートの回答者の約7割は10代から30代の男性です。この若い世代は、生まれたときから物質的に豊かな社会に育ち、これからさらに新しいものを生み出すことはなかなか難しい。これは現代社会の新しい悩みです。この悩みに立ち向かうとき、例えば仕事を探すとき、自分は何をやっているのが一番楽しいのか、そのことをどうやら仕事にできるのか、と考えてみましょう。お膳立ての整ってしまった社会では、意識的に選ばなければ、ルールに乗った生き方しかできなくなってしまいます。

今の若い世代には、新しい生き方を模索する芽がある、と期待しています。「働く意味」「生きる意味」といった形のないものに、答えを求める挑戦ができると思います。意識的に自分に問いかけて獲得した自由は、考え悩むという努力に裏打ちされているから、ちょっとやさそとでは揺るぎません。考え悩み、自分の人生を切り開いていく、その積み重ねが「自立」ということなのかもしれない。



語りはじめた 男たち

男性が、数ある「男らしさ」神話の中のひとつ「寡黙」をまとうことによって、これまでどれだけの人間関係を壊してきただろうか。そのことに気づきはじめてきた男性たちがいる。

お互いをわかり合うために自分自身の言葉を探し、語りかけ、相手の言葉をきちんと受け止める。人が人として関わるための、ごく自然な動きかけを取り戻そうとしている男性たちがともに語るグループを作っている。

メンズセンター

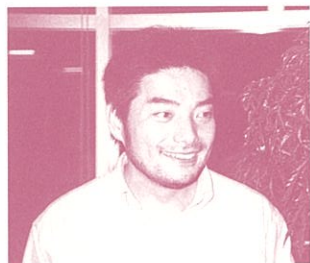
副運営委員長 大東貢生さん(30代 大学教員)

男性にとっての生き難さは女性の生き難さとは無関係ではあり得ない

「男らしさって何?」というメッセージを発信してきたメンズセンターは、男性の加害者性と被害者性を語り合う場として活動している。大きなイベントとしては、「メンズ・フェスティバル」を行政とのタイアップで毎年開催している。10回目にあたる今年、9月10、11日に大阪府のドーンセンターで「男のネットワークを考える」をテーマに行う。

行政が男女共同参画を推進していく時代的な流れもあり、1995年以降、各地の女性関連施設を中心にメンズリブの運動は広がっていった。しかし、メンズセンターの活動がマスコミで紹介されるようになると、家庭や職場でしんどい思いをしている自分を救ってほしいという男性からの問合せが増えてきた。男性の被害者性のみとらわれ、社会的強者としての立場を問題にできない男性は多く、男性問題のグループは、被害者としての側面、加害者としての側面のバランスを欠いたまま、活性化しつつも一方では拡散し、そして分散している。

子どものころからスポーツが苦手だった大東さんは、男らしくないというレッテルを貼られ、辛い思いをしてきた。メンズ



リブ研究会のイベントで出会った男性たちと語り合い、1年後には、あるがままの自分でいいのだと認めることができた。

一昨年男性向け経済誌にメンズセンターが紹介され、メンズリブの考え方に興味を止めず企業が現われた。企業も

メンタルヘルスに気遣う時代になっている。

活動10年を迎えるメンズセンターは、今年をひとつの区切りと考えている。今後はさまざまな分野に広がっていったグループとのネットワークにも力を注いでいきたい。

- 設立:1995年
- 連絡先:電話 06-6943-1850 FAX 06-4258-2600
- ホームページ <http://homepage2.nifty.com/akira-na/>

出来合いの会

池辺覚さん(40代 会社員)

しがらみのない気楽な仲間と、自慢料理を囲んで男もおしゃべり

会ができたきっかけは、自治体の主催する「男性のための料理教室」。当事30代の池辺さんのグループは、中堅として働いている層であること、年齢が近いこと、妻子があることなど共通点が多く、すぐに和気あいあいの雰囲気が出た。講座が終わったあと、池辺さんは、習った料理の腕前を披露する機会を兼ねて、「男が料理をし、妻と子どもをよぶ会」を提案した。

以来、年に一度、六家族が集まっている。子どもたちが大きくなり家族単位で行動する機会が減ってきたが、会が家族の集ま

るきっかけになる家族もある。

会の魅力のひとつはその場限りであること。仕事や町内会のつながりとはちがってしがらみのない関係は気楽だ。

年に一度でも、集まれば共通の関心ごとである料理をネタに、腕を振るい、自慢の新しい調理道具をお披露目しながら、子どものこと、仕事のことなど取り混ぜた話が弾む。

- 設立:1999年

おとこ倶楽部

藤井 貢さん(50代 会社員)

「男の自立」を語り合い、豊かで意義のある生き方につなげる

1994年に大阪市が主催した「男性学入門講座」の受講生有志が集まって発足。1年間にわたる講座では、性役割に基づく男性が抱えている諸問題に関する講義をはじめ、料理の実習も体験した。受講生は大学生から60代まで幅広く、さながら異業種交流の感があり、講座が終わったあとも継続的に集まっている。

活動は、「メンズ・フェスティバル」にシンポジウムを企画し参加したこともあるが、気軽に集まり食事や酒を酌み交わしながら「男性の自立」をテーマに話をすることが中心。人権問題や「男性が生活面でいかに自立していないか」といった話題は、職場の同僚との間でまず出ることはない。会員の多くはこの「語

り合い」がきっかけで、家族との時間を大切にしたり、自分自身の生活を見直すことに繋がっている。

1年前に代表になった藤井さんは、他府県に転勤になり、会の招集が思うようにできていない。実際問題、仕事以外の活動に主体的に関わる時間を生み出すのはなかなか難しいと実感している。それも男が男ゆえに抱える問題のひとつではあるが。

- 設立:1995年
- 連絡先:携帯アドレス tiho-mitsugu-0606@k.vodafone.ne.jp

G-FRONT関西

事務局長 K・Kさん(30代 研究員)

仲間がいる安心感を軸に広がるネットワーク

セクシュアリティをテーマに誰もが生きやすい社会をめざす。活動は大きく3つに分かれる。第1は「住みよい社会を作る」。セクシュアル・マイノリティに対する差別や偏見を解消するため、人権問題としての講演会や読書会を開催している。第2に「仲間を作る」。花見やバーベキューなどのイベントを開催し、交流の機会を設けている。第3は「ものを作る」。個人では、必要な情報を得たり、自分の気持ちを表しにくい状況にあるため、コミュニティの内外に向けて、会報、機関誌、WEBページなどで情報発信をしている。それぞれの活動には、会の趣旨に賛同す



る人なら会員でなくても参加できる。話の好きな人、作業の好きな人、それぞれが居心地のいい関わり方をすればいい。

メンバーの多くは、自分のセクシュアリティについて悩んできたが、悩みを話せる仲間ができて、楽になったと言う。昨年、「老い」をテーマに、シンポジウムを開き、機関誌を編集した。「生き方のモデルがない、どう生きたらいいのかわからない」という個人の悩みからの出発だったが、たくさんの人が悩んでいる問題でもあるということがわかった。自分より先に生きている人の話から、「自分なりの生き方」でいいんだと思えるようになった、とK・Kさんは言う。「自分を認める場」としての活動を今後も続けていきたい。

- 設立:1994年
- 連絡先:E-mail gfront@muh.biglobe.ne.jp
- ホームページ <http://www5e.biglobe.ne.jp/~gfront/>

男も女も育児時間を!連絡会(育時連)

松田正樹さん(40代 アルバイト)

男性が当たり前のように仕事と家庭を両立する社会にしたい

「男も女も育児時間を認めて」と会社に要求することを趣旨に、育児と仕事の両立を考える場として発足。ニュースの発行、イベントの企画のほかホームページやメーリングリストの運営も行っている。

会には代表を置かず、誰でも自由に参加することができ、経費は任意カンパ方式。これは設立当時から変わらず、会社組織のピラミッド型上下関係に嫌気がさしているメンバーが多いことと関係している。24年間続いている理由のひとつでもある。

活動は、「仕事と家庭の両立」をテーマに、やりたい人がやりたいことをやる。月例会は東京なので、関東の人がほとんどだが、会社の出張を月例会に合わせて地方から参加する人もいる。男性が仕事と家庭の両立について話せる場の少ないことがわかる。

松田さんは、子どもの生まれた1992年に育児休業法ができたので、育児休暇を会社に申請したところ、「前例がない」という理由で拒否された体験をもつ。その子どもが1歳のとき、有給休暇を時間利用して、毎日保育園の送り迎えをした。2歳からは90分の育児時間が認められるようになった。育時連に参加したきっかけは、「職場では、和を乱すやつとみられていたのだから」。

男性にとって仕事と家庭の両立が当たり前の社会になったら、育時連の活動は必要ないが、現実はまだ必要とされている。

- 設立:1980年
- 連絡先:ホームページ <http://www.eag.org/>

男楽会

代表 山田敬次さん(70代)

肩の力を抜いて、自分の言葉で話そう

昨年、西宮市男女共同参画センター ウェーブで開催された「男のための楽な生き方講座」(全5回)の受講生有志がこのまま終わりにするのは名残惜しいと、ウェーブを拠点に活動している。継続の理由は、男性だけの講座があまりないこと、「楽な生き方」がテーマということが大きい。「定年退職してから、外に出るチャンスを待っていた」と言うメンバーもいる。

講座では、毎回必ず近況報告をした。講師に「自分の言葉で話して」と言われ、今までは「いいこと」を言わなければと気負っていたことに気づいた。近況報告といっても井戸端会議のようなもの。しかし、この近況報告によって、お互いが打ち解け、相手を理解するのに役立った。今までとはまったくちがう人間関係ができた大きな要因でもある。

月に1回の定例会は、毎回設定しているテーマについて話す。



いろいろなキャリアの人がいるので、自分の知らない話が聞けて楽しい。次回4月のテーマは「遺言」。

メンバーには退職した人だけでなく、現役世代もいる。参加する人が増えれば話題も広がるので、興味ある男性はぜひ気楽に遊びに来てほしい。

- 設立:2004年
- 連絡先:西宮市男女共同参画センター ウェーブ 0798-64-9495